

島の自然を地域の力で守る

環境保全

ビーチクリーンアップ大作戦

漂着ゴミを拾って調べて考える



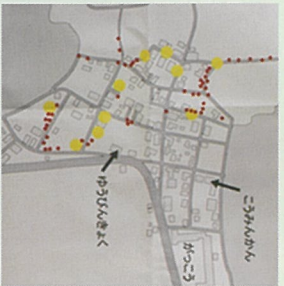
八重山環境ネットワーク「西表エコロジエクト」と協働で10年以上にわたって、毎月1回の海岸清掃活動「ビーチクリーンアップ大作戦」を行っています。地域の住民や子供たちがボランティアとして参加します。

拾ったものもひとつも流れ着く漂着ゴミは、その処理の問題も含め、なかなかゴミの見えない環境問題です。そこで私たちはただ拾うだけでなく、回収したゴミの種類やベトナムの原産国を調査し、原因や解決策を探る際に役立ててもらえるようなデータを蓄積しています。また、生活の中でゴミの発生を減らしている普及啓発活動も行っています。

2011年より毎年実施している「イリオモテボタル調査観察会」には、地域の住民や子供たちがたくさん集まります。イリオモテボタルの発見者である大場信義先生のレクチャーを受けた後、参加者全員が調査員となって租納の調査区域内を歩き、観察したイリオモテボタルの数と場所を記録していきます。個体数や生息環境の変化を、地域のみならずと見守っています。

地域住民による里地のモニタリング調査

モニタリングサイト1000 租納サイト



魚たちの暮らす川を守りたい 浦内川の絶滅危惧魚類の

調査・保全活動

400種を超える魚が生息する浦内川で、絶滅危惧魚類の定期的なモニタリングを行っています。また、小冊子を作成して、普及啓発に努めています。



島の自然と文化に興味を持つ

環境教育

高校のない西表島では、15歳で子供たちは島から巣立っていきます。それまでの間に島の自然や文化を学ぶ機会をたくさん持つてほしいという思いから、2012年より「エコツアー子どもウイナー」を開催しています。子供たちが楽しく学べるように、毎回趣向を凝らしたプログラムを組み立てています。今では夏休みのイベントとしてすっかり定着しています。子どもウイナー以外にも、学校や公民館などからの要望に合わせて、いろいろな分野での事前授業を行っています。



地域の学びのお手伝い
エコツアー子どもウイナー



様々な研修・実習プログラムをコーディネート

環境教育プログラム



西表島に研修・実習の目的で訪れる大学生や専門学校生のプログラムをコーディネートしています。担当教員と話し合いを重ね、専門分野や様々な要望に合わせて、高い学びや経験が得られるようなプログラムを提供しています。

文化継承

島の生活文化を暮らしに取り入れ込む



島の先人たちの知恵の結晶ともいえる様々な生活文化を、生活に取り組みながら受け継いでいくことをめざして、長年行われてきた手芸講習会を開催しています。アタシ、マニ、菓などの島の自然素材を利用した民具づくりのワークショップを、一般向け・継承チーム向けに定期的に行っています。季節に合わせて、素材の収穫、下ごしらえから道具へと完成するまでのすべての行程を体験し、そうすることによって自然とのつきあいを身につけていきます。

島内外の文化交流の場

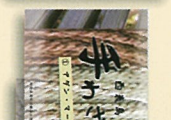
西表島人(しまびとら)文化祭

「西表島文化祭」は、「伝承・継承・創造」をテーマに2年毎に開催しています。古くからの自然に育まれた暮らしの中で、島民が継承してきた伝統文化の発表の場、地域の様々な文化活動の紹介をする場、と同時に島内外の文化交流の場となることを目指しています。手工芸品の展示・販売、自然環境に関する展示、体験コーナー、島のおいしいもの「パイ」、舞台発表など盛りだくさんの内容で、回数を重ねる毎に来場者も増え、今では島の一大文化イベントとなっています。



伝統文化の調査・記録

次世代へと受け渡すために
手から手、口から口へと受け継がれてきた島の伝統文化の中には、継承の危機にあるものもあります。途絶えさせることなく次の世代へと受け渡すために、書籍や映像資料を作成しています。



エコツアーリズム

自立した地域経済をつくる

観光事業者のスキルアップ
エコツアーリズム研修

「エコツアーリズム」「プログラム開発」おもてなし「外国人受け入れ」などをテーマに、地域の観光事業者向けに、島外から講師を招いて様々な研修・講演会・勉強会を開催しています。

自立した地域経済をつくる
エコ市

フリーマーケットに、てづくりりや食品パイ、体験コーナーを合わせた小さなイベント「エコ市」を定期的に開催しています。地域内での資金の循環や新たな特産品の発掘を目指しています。



東日本大震災被災地支援活動 ニューズレター

『すけきた』の発行

東日本大震災の直後、会員からの「西表島の黒糖を被災地に送ってあげたい」という声を受けて、現地で活動するNPOへの橋渡しと、募金や広報などの活動のサポートをしました。現在も、「復興支援かわらばん『すけきた』」を月1回発行して被災地の現状を伝え続けています。

